

— 家族の就労形態と健康状態との関連性 (分析②) —

福山市立女短大 ○三谷璋子 奥山清美 津川 淳 加納三千子
 倉田美恵 土屋房江 鈴木雅子

目的 (第10報に同じ)

方法 家族の就労形態と健康状態 (全身的症状・部分的症状・既応症) の間における関連性について検討した。

結果 1) 全身的症状は、家族の就労形態により、いずれも特徴的なパターンを示し、(核)と(拡)で大きく異なっていた。即ち、(核)-[フ]- $\textcircled{28}$ に症状を訴えるものが少なく逆に(拡)-[フ]- $\textcircled{28}$ に高かった。つまり、家族の就労形態が健康状態 (全身的症状) に何らかの影響を及ぼしていると考えられる。2) 部分的症状では、(核)-[フ]においては就労形態別の差はみられず、(拡)においては全身的症状と同様 $\textcircled{28}$ が高かった。3) 既応歴では、(核)が概して高く、現在のり患率の高いのは(拡)-[フ]- $\textcircled{28}$ に高かった。4) 以上より健康状態にみられる特徴的なタイプとして(核)-[フ]- $\textcircled{28}$ と(拡)-[フ]- $\textcircled{28}$ があった。それでこれらの属性分析を行うと、(核)は(拡)より高年令層が多く、また低所得者が多くみられた。5) 健康状態を得点化した7タイプとの関連性は、(核)-[フ]にみられるパターンは、健康状態が比較的良いところにおいては、これまでにみられたパターンと同様であった。しかし、(拡)-[フ]においては、これまでのパターンと異なり、健康状態が比較的悪いものが $\textcircled{無} < \textcircled{28} < \textcircled{29}$ であった。